

駆出率が保たれた心不全患者へのニトロ投与は逆効果

駆出率が保たれた心不全患者へのニトロ処方、運動耐性を十分なものとするために一般的に行われている。そこで本研究では、日常生活動作に対する効果について、多施設共同二重盲検無作為化プラセボ対照クロスオーバー試験を実施し検証した。

駆出率保持心不全患者 110 例を無作為に 2 群に割り付け、一方には一硝酸イソソルビド（1 日 1 回投与）を 30mg から 60mg、120mg へと段階的に増量して 6 週間投与した。もう一方の群には、プラセボを 6 週間投与した。その後、両群をクロスオーバーして同様の投与を 6 週間行った。その結果、一硝酸イソソルビド 120mg 投与期間は、プラセボ投与期間に比べ、有意差はないものの日常生活動作レベルの低下傾向が認められた（ -381 加速度単位、 $p=0.06$ ）。1 日活動時間の平均値は、一硝酸イソソルビド 120mg 投与期間のほうがプラセボ投与期間に比べ有意に短かった（ -0.30 時間、 $p=0.02$ ）。また、一硝酸イソソルビド全用量投与期間を通じて、日常生活動作レベルはプラセボ投与期間に比べ有意に低かった（ $p=0.02$ ）。日常生活動作レベルは、一硝酸イソソルビドの投与量が増えるに従い、有意な低下が認められた。なお、6 分間歩行距離、QOL（生活の質）スコア、NT-proBNP レベルは、両群で有意差はなかった。

したがって、駆出率が保たれた心不全患者に一硝酸イソソルビド（商品名：アイトロールほか）を投与しても、プラセボを投与した場合と比べて日常生活動作レベルや QOL（生活の質）の向上はみられず、逆に 1 日の活動時間が減少し、日常生活動作レベルにも低下傾向がみられることが示された。

出典：New England Journal of Medicine. 2015; 373(24):2314-2324